

Title	宇野弘蔵著 経済学方法論
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.6 (1962. 6) ,p.617(89)- 618(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19620601-0089
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620601-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

をみると共に、著者独自の宏大にして柔軟な構想に圧倒されるのである。

さて本書の内容を極く簡単に紹介しておく。

一章 「歴史家と事実」 十九世紀の歴史家達が事実尊重の気風に圧倒されていたのに対し、二十世紀の歴史家の中からは歴史的事実とは歴史家が主体的にえらびだし再構成したものにすぎないという思想がうまれてくる。

著者は一面でこのような思想を承認するが、同時に事実そのものは客観的に過去に属しているものであって、一面だけを強調することは主観主義か客観主義に陥ることとする。問題はあれかこれかではなく「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きること知らぬ対話」なのである。

二章 「社会と個人」 社会が先か、個人が先かという問題は鶏と卵の問題と同じであり、社会の発達と個人の発達とは相互に制約し合う。この問題はさらに二つに区別されるのであり、その一は歴史家自身と社会の問題である。この問題で重要なことは歴史家の研

究に際しての立場を知ること、その立場の背後にある社会的歴史的背景を知ることである。第二の問題は実際の歴史における社会と個人の関係である。この点で著者が指摘するのは第一に歴史にとっては偉大な個人の働きが重要であると同時に、大衆も大切な役割を果たすこと、第二に個々の人間の意図とそれら人間の社会的行動の結果とはしばしばくいちがうものであるということである。

三章 「歴史と科学と道徳」 歴史は科学であるという命題の真の意味は、決していわゆる歴史法則の絶対化を信ずることとはならない。法則とは「更に進んだ研究および新しい理解に至る道を示すところの有効な仮説」以上の意味はもたない。それはマックス・ウェーバーのいうように現実理解の思想道具である。このような理解に立てば歴史における一般性と特殊性の関係についても、それが相互作用の関係にあることが判明する。さらに歴史家は未来の歴史の方向について予言しうるかの問題についても、それは一般性との関係ではありうると同時に、偶然の要素のいりこみうる特殊性を捨象せざるをえないという限

変化である。このような立場で歴史における判断の基準を求めるとすれば、それは「普遍的妥当性を要求するような原理」ではなく、「最も役に立つもの」ということになる。この基準は「存在するものはすべて正しい」という見解に通じ、即席の判断をさげ、まだ起っていない事柄に照らして判断に訂正を加えることができるのである。

六章 「広がる地平線」 二十世紀中葉の現在には中世世界の崩壊以来の烈しい変化の時代である。第一に現代人は前例のない強さで自己を意識している。このような自己意識の発展を促進した人々に、ヘーゲル、マルクスという系列とフロイトをあげている。特にフロイトについては人間の行動の無意識の根源を明らかとすることにより理性の領域を拡大した点に注目している。ところで自己意識の発展は単に思想の面だけでなく社会体制についても計画的要素の増大のうちにみることができ。勿論理性の濫用も同時に指摘されなくてはならない。しかし地平線の広がりによって世界史の巨大な変化の起りつつある現在、大切なことは変化を歴史の前進的要素として

果が与えられている。さらに歴史を研究する場合には研究する主体のみ方、立場が、客体の観察の中に入りこむのである。これは社会科学の特殊性であるが、最近の物理学において同様のことがいわれていることに注目する必要がある。また主体の立場を強調するの余り、超越的な神や道徳等もちだして歴史を裁くやり方には賛成しえない。勿論歴史の研究には研究主体の価値判断が必ず前提とされるが、その価値判断自身が歴史に制約されたものである。

四章 「歴史における因果関係」 歴史の研究は原因の研究であり、歴史家は解答の見込みのある限り「なぜ」と問い続けるのである。この場合我々はまず一つの事件についていろいろの原因をあげる。その上で諸原因のリストを秩序づけ、上下関係をつくる。ここで「歴史主義の貧困」の著者ポッターが行った決定論への批判をとりあげ、人間の行為が対象であるからこそ原因と結果が問題となるのである。行動の自由と決定論とは相互作用の関係にあると指摘する。ここに歴史の必然性の問題を解く鍵もあるのである。そしてまた歴史

みることに、そして変化の複雑な姿を理解するための案内人は理性であると確信することであり、英国内の保守主義に対しては「それでもーそれは動く。」というべきである。

以上の著者の思想に対し、我々は歴史の進歩と理性に対するひかえめではあるが、確固とした信念がいささか手放しのものであり、「存在するものは正しい」という主張と共に疑問としてこのされる。問題はまさに主体的な理性の運用と進歩へのかかり方にあるのであり、現代の危機はこれに対する深刻な挑戦であり、これへの回答は単なる理性だけでなく全人的な疎外からの回復によってなされなくてはならない。(岩波新書・二五二頁、一五〇円)

宇野弘蔵著 『経済学方法論』 一寺尾 誠一

『経済学方法論』

周知のごとく、戦後のわが国における「資本論」研究は他国に例をみないほどの進展を示し、近年においてはかかる研究から一歩出

における偶然性のもつ役割も理解しうる。偶然の中には歴史のコースを変えた偶然があるのであり、これを否定することは誤りである。しかし歴史の合理的解釈(因果関係)にとつては全くの偶然はいりこむ余地はない。何故なら歴史家は歴史的に有意義な因果の連鎖だけを多数の因果関係の中から選びだすのであるから。

五章 「進歩としての歴史」 歴史を神秘的な観点からみることも、なげやりのに全て無意味であることもいずれも誤りである。著者はキリスト教の目的論的歴史観から十九世紀の現世的進歩への無条件の信仰への発展をみた上で、歴史の進歩の意味をとく。すなわち第一に進歩とは獲得された能力、技術の、世代から世代への伝達を通じて行われる。第二に進歩は無限の過程であり始めや終りはない。この点でキリスト教もマルクス主義も終末的な歴史観を主張する意味で問題を残すのである。大切なのは人間の可能性の漸次的発展を信ずることである。そして歴史の進歩と共に現在から過去をみる歴史家の眼もいよいよ進歩するのであり、唯一の絶対者は

新刊紹介

たより広範な、より現実的な研究が要求されている。そのような過程で『資本論』理解に大きな足跡を残し、現在それを語ることなく『資本論』研究を語り得ない「体系的」な学説として宇野弘藏氏の諸著作が現われたのである。現在、少くとも理論的分野におけるテーマについて考察を加えようとするなら、吾々は、宇野氏の業績に目を投うことは出来ない。それに対していかなる態度をとるにせよ、問題提起の中に所謂「宇野理論」に何らかの態度をもって臨む必要がある。また、それは、スターリン批判を契機としたわが国の思想状況のうちにも影響を与えつつあり、たんに経済学分野においてのみ考えることはできない。では、かかる深みのある体系性をささえるものは一体いかなるものであろうか。

本書は、今迄宇野氏自身が個別なテーマの研究のうちで示唆された、氏の独自の方法を総合的に吾々に明らかにしている。

宇野氏の経済学体系は、周知の三段階論——原理論・段階論・現状分析——なのであるが、従来それらの各要素がいかなる観点から統一的に、「体系的」に把握されるかはいたっ

て不明瞭であった。とくに原理論・段階論兩者の關係が論理的に考えられたものであるかどうかは——宇野氏自身がかつて述べておられたように——あきらかにされていたとはいえなかった。本書においては未解決にのこされていた問題が原理論の純化とそれから必然的に展開される段階規定という観点から論じられている。本書のI経済学の対象、II経済学研究の分化はそれぞれ、社会科学としての経済学における原理的認識の必然性と、資本主義の歴史性との関連という点を中心に、主として原理論・段階論の關係がとりあげられており、マルクス・ヒルファディング・レーニンといういわば原理論と段階論とを認識せんとした先人の業績の不十分な点についている。とくにマルクス（『資本論』）は原理論的認識の確立という観点からとりあげられ、IV『資本論』における方法上の諸問題として論じられ、価値論、恐慌論、利子論等の分野について宇野氏のマルクスへの疑問が述べられている。これらに共通するのは「労働力商品化」を契機とした、資本主義社会の「理論的純化」と、『資本論』自体のうちにあるかかる純

化を阻害する要因の指摘であり、ここから氏の経済法則論も展開されてくる。本書のIII、経済学と唯物史観は、経済法則と歴史法則との関連をのべ、経済法則の「原理論」的な自立性が強調されている。

以上のような内容をもって、従来の宇野氏の経済学方法論はかなり明白なものとなっている。しかし、それはいまだ原理論と段階論との結びつきを吾々に納得的に説明するものとはなっていない。というのは原理論を純化する方法が段階規定をあたえる根拠にはなりえていないからであり、とくに経済法則が自らそれを歪曲してゆくという論理が原理的にどう把握されるのが不明瞭となっているからである。しかしながら、本書は、それをつらぬくある種の「科学主義」とともに、社会科学方法論として、今後充分な検討を加える必要がある。また従来の研究がこれを機に反省されなくてはならないのではなからうか。（東大出版会・A5・三二三頁・六八〇円）